

聖書：ヤコブ 3：1～6

説教題：舌は火であり

日時：2017年10月1日（朝拝）

このヤコブ書 3 章では「ことば」の問題、あるいは「舌」の問題が語られています。ヤコブはこれまで御言葉を聞くだけではなく実行すべきこと、また信仰だけでなく行いが必要であることについて語って来ました。その行いの具体的な適用の一つとして言葉の問題について語るのです。もしかすると私たちは行いというと手足を動かすことばかりを考えるかもしれませんが。そして言葉は行いという範疇には属していないと思うかもしれませんが。しかしヤコブはすでに「ことばの重要性」について触れて来ました。1 章 19 節には「だれでも、聞くに早はく、語るにはおそく、怒るにはおそく」とありました。また 1 章 26 節では「自分は宗教に熱心であると思っても、自分の舌にくつわをかけず、自分の心を欺いているなら、そのような人の宗教はむなしいものです」と言いました。その言葉の問題、舌の問題についてヤコブはこの 3 章で取り上げるのです。

まず 1 節に「私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。」とあります。これはどういうことでしょうか。聖書は私たちに献身を勧めているのではないのでしょうか。多くの人が教師になることは望ましいことなのではないのでしょうか。しかしヤコブはそこに危険なものを見えています。当時のキリスト教共同体において教師は高く見られていました。ユダヤ教におけるラビのような立場です。ユダヤ人の間では、子どもをラビにするのが大きな夢でした。キリスト教会においては教師やリーダーはそのような立場にありました。パウロも手紙の中で、教師また教える賜物を使徒・預言者に次ぐ高い順位に置いています。それゆえ私もこの共同体の中で教師の職に就きたい。人々に教える者になりたい。そうして人々に認められたい、評価されたい、影響力を持つ人になりたいという願いが出て来るのは十分考えられることです。実際この手紙の読者たちの中には散らされた信仰共同体、その小さなグループにおいて、自分こそ指導者になりたいと願う人たちが多くいたようです。しかしもしその人が言葉を制さない人だったら大変なことになると思います。その人は自分の言いたいこと、主張したいことをしゃべって良い気分であるかもしれませんが。しかしそれを聞かされる方はうんざりして来るということがあるものです。いやそれだけならまだしも教師が語る言葉によって教会は大きな影響を受けます。もしその人が 14 節に出て来るように、苦いねたみや敵対心によって言葉を振り回す人だったら教会は大きくかき乱されてしまいます。あるいは 4 章 1 節に出て来

るように、戦いや争いを引き起こす人だったら大変です。また4章11節で見るように、人の悪口を言ったり、人を批判するための手段として言葉を使い、人をさばく武器にしてしまう。舌を制御しない人が教師になることほど、教会にとって恐ろしいことはありません。

ヤコブはその願いを思いとどまらせるために、1節後半で「ご承知のように、私たちは教師は、格別厳しいさばきを受けるのです。」と言います。これはもちろん教師である人は、イコール厳しいさばきを受けるという意味ではありません。それならだれも教師にはならないでしょうし、私もすぐやめたいと思います。そういう意味ではなく、ここは教師である人は、その立場のゆえにやがての日により厳密に調べられ、評価されるということでしょう。教師はまずその言葉をもって人々の霊的益に仕えるように召されています。そして教師の言葉は良くも悪くも教会員に大きな影響を与えるでしょう。それゆえに、その語る言葉は決して軽くは扱われない。また自分が語った言葉が真理また真実であることを行いや生活をもって現わしたかも問われる。真理を知っている者として、人に教える者として、その知識に応じて生きたかどうか。こうしてヤコブは教師に伴う「榮譽」よりも、「責任」の重大さを思い起こさせているのです。軽々しく教師になることを戒めているのです。浮ついた自己中心的な思いで志すことに警告を発しているのです。

そして2節以降で言葉の大切さについて語ります。彼は言います。「私たちはみな、多くの点で失敗するものです。もし、ことばで失敗しない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。」これは何を言っているのでしょうか。ことばの制御は難しいということを行っていることは分かります。しかしもしそれがきちんと制御できるなら体全体もコントロールできると彼は言っています。言い換えれば、体全体を制御する聖化の歩みにおいて、言葉の問題は重要なカギを握っているということではないでしょうか。ことばを制することができるなら、からだ全体をも制することができる。たかが言葉と言ってはならない。そこに聖化のカギがあるとと言っても良いほどです。

ヤコブはそのことを具体的な例を通して示して行きます。まず一つ目は3節の馬です。馬は当時の最も力強い乗物です。今日のスポーツカーです。それは私たちより大きく、重い動物であり、気性の激しい暴れ馬なら到底手に負えない。何とか動かそうと思って

あちこち叩いたり、押ししたりしても、かえって思い通りにはならないでしょう。その馬をコントロールするにはどうしたら良いでしょうか。それはくつわを口にかけることです。あの口にはめる小さな部分をしっかりと制御するなら、何と大きな馬全体をコントロールすることができる。実に思わぬところに馬全体を御するためのカギがあるものです。ですからそこを集中的に制御すれば良い。

二つ目のたとえば 4 節の船です。「あのよう大きな物」と表現されているように、船は一層重くて動かしにくいものです。しかもここにはより困難な要素が加わっています。すなわち強い風に押されるという状況です。こんな状況ではコントロールできるどころか、ただ翻弄されるまま運ばれて行くしかないように思います。ところがそんな状態の船でも、ごく小さな舵によって御することができる。至って小さな舵ですが、それをしっかりと握ることによって、大きな船全体を思う通りの所へ導くことが可能になってきます。

こう述べてヤコブは 5 節で「同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。」と言います。「大きなことを言って誇る」という部分は悪い意味のようにも取れますが、3 節と 4 節に続いて 5 節が「同様に」と始まっていることを考えると、ここはまだ否定的なことを言っているわけではなさそうです。舌も小さな器官だが、先のたとえと同様に大きな役割を果たすことができる。そのことについて舌は正当に誇ることができるという意味だと思われます。ヤコブはこうして、体全体を操るカギは舌にあることを暗示しています。しかしだからと言って彼は何か舌の使い方についてのテクニックを教えようとしているわけではありません。私たちは今、舌に注目していますが、その舌は心に満ちていることを話すのだとイエス様は言われました。マタイの福音書 12 章 34～35 節：「まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましよう。心に満ちていることを口が話すのです。良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。」 ですから、より大事なものは心と言えます。心が正しいもので満ちているなら、その正しい倉から正しい言葉が出て来ます。私たちの口から出て来る言葉は、私たちの心の中がどうなっているのか、私たちの心の中には何が詰まっているのか、それを端的に示すインデックスカードのようなものです。ですからより根本的に考えるなら真に大事なことは心を良いもので満たすこと、キリストの平和で満たされているようにすることです。その時に私たちは良い言葉を口から出すことができます。そしてそのようにして舌を正しく制御することを通して、私た

ちは体全体をも制御することができるということが言われているのです。

しかしもし舌を正しく用いないなら、それは破壊的な働きをします。5 節後半は舌の悪い働きについて語る 6 節への橋渡しをする部分です。ヤコブは言います。「ご覧なさい。あのよう小さい火があのような大きい森を燃やします。」 しばしば山火事の原因になるのは、タバコの吸殻などの小さな火の不始末です。それを捨てる人は、もうほとんどその火は消えたと思っています。こんな小さなものをその辺に捨てたって、どうってことはないと思います。ところがその小さな火が、やがて何ヘクタールもの森林を焼き尽くす大火事へと発展する。私たちの舌もまさにそうだとヤコブは言いたい。6 節でヤコブは「舌はまさにそのような火なのです！」と言っています。口は災いの元と言います。まさにこの小さい口が、何と様々な人間関係を破壊し、森全体を燃やすようなことをしているのでしょうか。

ヤコブは私たちの舌について、それは「不義の世界」ですと言います。「世界」と訳されている言葉は、通常「世」と訳される言葉で、「世」とは、神に敵対し、神に背を向けているこの世界の総体を指します。つまりヤコブは、私たちの舌は「不義の世」というこの世の性質が最も良く現れる部分だと言っているのです。もちろん神は私たちの舌をそのように造られたわけではありませんが、墮落後のこの「世」の性質は私たちの舌に最も現れやすい。神に喜ばれないものが次々に吹き出てくる場所になっている。

この小さな私たちの器官がもたらすものが 6 節後半に 3 つ述べられています。まず一つ目は「からだ全体を汚し」。ここでの「からだ」は単なる肉体のことではなく、私たちの全人格を指すと考えられます。イエス様はマタイの福音書 15 章 18 節でこう言われました。「しかし、口から出るものは、心から出て来ます。それは人を汚します。」つまり舌を制御せずに悪い言葉を出す時、それはそこで止めることができたはずのものを外に出したということであり、従ってそれは悪に身を委ねたということであり、自分の人格全体がそちらへ進むための門戸を開放したということです。従ってそれはその人自身を汚す。たとえば私たちは良くない言葉を自分の口から出すことによって、益々怒りや憎しみに駆り立てられる場合があります。それを正しく制御していれば、体全体もそれ以上は進まないのに、それをを出してしまった結果、歯止めが利かなくなる。そして引っ込みがつかなくなった自分を正当化してさらに前に進む。そして益々罪の道を進んで自分を汚すのです。ですから私たちは悪い言葉を出した時、スカッとしたと思うかもし

れません。相手に言ってやった！自分の不満をぶつけてやった！しかしその時、本当に損をしているのは自分なのです。悪い言葉を出した時、私たちは自分自身に悪影響を及ぼす発言をしたと思うべきでしょう。

二つ目は「人生の車輪を焼き」。これはライフサイクル、人生全体を表す表現です。すなわち私たちの舌は私たちのからだを汚すだけでなく、私たちの人生全体に火をつける。その時だけの問題にとどまらず、それ以後の人生も、その火の力の下で生きることを意味する。実際、舌を制さない人は、その時そうしなかったというだけでなく、むしろ機会あるごとに益々同じことをするでしょう。自分を訓練しないで放っているのに、一人でそうは行動しなくなるということはありません。一旦燃え始めた火は、そのままにしておけば最後を焼き尽くすまで燃え続けます。果たして私たちは自分の舌を無頓着に使うことによって人生全部を燃やし、台無しにしたいでしょうか。

そして三つ目は「ゲヘナの火によって焼かれます」。新改訳はゲヘナの火によって私たちがついには焼かれ、さばかれるという意味に読めますが、信頼できる多くの学者は、これはその火の力がどこから来ているかを示す表現であると見ます。すなわち舌の火は、ゲヘナの火によって点火されているということです。ゲヘナとはエルサレムの南にあるヒノムの谷、ヘブル語で「ゲー・ヒンノム」という言葉をギリシャ語化した言葉です。そこはゴミや死体処分のための火が燃やされ続けた場所で、当時この「ゲヘナ」という言葉は悪の源を指す表現として使われていたようです。つまりゲヘナの火によって点火されるとは、悪い言葉を吐く舌は悪の源とつながっているということです。すなわちそれはサタンとの関わりの中にある。とするとヤコブが言っていることはこういうことです。私たちが肉にまかせて舌を制御せずにあちこちに火をつけることをしている時、実はそこにいてうちわをパタパタし、その火が勢いよく燃えるように仕向けているのはサタンであるということです。ここに舌がもたらす火の本質を私たちは知らなくてはなりません。私たちの一言がとてつもなく破壊的な働きをするのは、それが人間的な火ではないからです。私たちが舌を制さない時、実は悪魔と一緒にの道を進み、悪魔によって一層あおられているということです。神の働きを壊す霊的な放火魔、主犯者サタンと一緒にあって、あちこちに火をつけ、神のみわざを破壊する働きをするための手下になっているということです。

果たして私たちはどうでしょうか。自分の舌に注意しているでしょうか。もし私たち

が自分の舌をコントロールしないで放っておくなら、それは自分を汚し、自分の全人生を燃やすばかりか、サタンの道具となってサタンの国拡大のために仕えるしもべになってしまう。実に舌は私たちの人生の行く道を決定するカギとなる部分です。私たちの聖化の歩みを考える時、まず注意して訓練しなければならない器官です。先に触れたように、突き詰めれば、より大切なのは私たちの心です。心に満ちていることを口が話します。ですからまず私たちの心がキリストの平和で満たされているようにすること。そこから神に喜ばれる言葉を口から出す。内にある良いものが外に現れるようにする。そして人の徳を立てる言葉、人の徳を養うのに役立つ言葉、聞く人に恵みを与える言葉こそを出して行く。その課題に取り組むことによって私たちは体全体をも御することができる者とされていくのです。信仰が行いに現れ、行いによって全うされる歩み、そして主の栄光を表す歩みへと導かれて行くのです。